未来へひらく
ミュージアム

参加体験型の感動を提案

―市民とともにある九州国立博物館―

九州国立博物館は
「市民とともにある博物館」をコンセプトに、
参加体験型展示室「あじっぱ」や
環境に配慮した最新施設など、
さまざまな試みに挑戦。
予想以上の来館者数を獲得した
その秘密に迫ってみたい。

墓信 祐爾（だいのぶ ゆうじ）
九州国立博物館　学芸部文化財課長

九州国立博物館の誕生「文化は西から、九州から」

当館は、国際社会におけるアジアの重要性が日々増大している今日、わが国の歴史と文化の成り立ちをアジア史的観点から考える機会を提供し、アジアを中心とする諸外国との相互理解を深めるために設立された四番目の国立博物館（二〇〇五年一〇月一六日福岡県太宰府市に開館）である。

「あじっぱ」外観。
カラフルな色使いでねぶた風に
「あじっぱ」と表示

韓国屋台。
お面、着物、凧、帽子、花瓶など
さまざまなものが置かれている

先行する三つの国立博物館の創立はすべて一九世紀末（一八七二年の東京国立博物館、一八九五年の奈良国立博物館、一八九七年の京都国立博物館）にさかのぼり、歴代の首都にある。朝鮮半島や中国大陸に近く、「遠の朝廷」とよばれた大宰府（現太宰府市）が置かれていた北部九州地方には、古くより大陸からの最新情報がもたらされ、国内各地へ伝えられた。そこから当館のキャッチフレーズ「文化は西から、九州から」が生まれたのである。

最後発の国立博物館として、ともすれば「来たい人、見たい人だけのもの」となりがちな従来型の博物館から、興味のない人にも来てもらい感動を共有できる博物館を目指すことが計画段階から求められてきた。そのために、エントランスロビーと一体化が可能な多目的なミュージアムホールの活用とともに、将来の来館者となることが期待される子どもたちへの仕掛けが重要な要素として認識された。その答えが「あじっぱ」である。

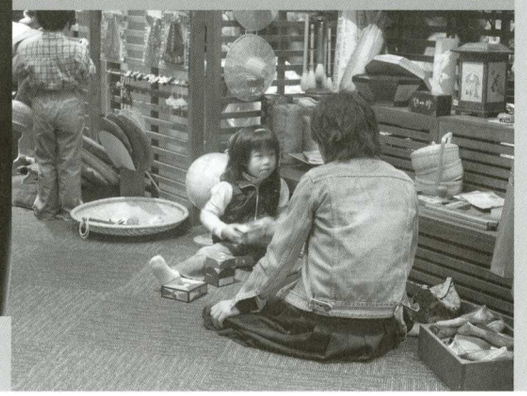
参加体験型展示室「あじっぱ」

博物館で展示されている作品につけられた日本語名称は漢字だらけで、読み方も含め専門的すぎて何のことかわからないと感じた経験はたいていの方にあるのではないだろうか。そのため、各地の博物館では、わかりやすい日本語名称を用いようとする動きがにわかに広まりつつある。しかし、そうした工夫を重ねたとしても、博物館来館者のうちある程度の割合を占めている小学生やさらに小さな子どもたちにはまだまだむずかしい。

そこで当館では、国立博物館としては初めて、常設の参加体験型展示室「あじっぱ」を、一階無料ゾーン・エントランスロビー奥に設けた。全面ガラス張りで鮮烈な色彩にみちたこのコーナーは、子どもたちが自由に遊べる「アジアの原っぱ」となることを祈って名づけられた。このコーナーにこそ、当館の目指す「市民とともにある博物館」という方向性がわかりやすくあらわれていると思われるので、ようやく開館一周年を迎えたばかりの九州国立博物館の紹介を「あじっぱ」からはじめよう。

「あじっぱ」の主役は、あまり博物館になじみのない子どもたちである。彼らにとって、声を出さずに、暗い展示室内で、ひびが入っていたり、全体に暗く、汚れているとしか思えないような古いものを、ケースのガラス越しに、静かに鑑賞することはたいへん辛いことに違いない。そしてそうしなければいけない博物館に行くことになんか、何の魅力も感じないだろう。どうすれば、博物館という場所が楽しいと感じてくれるだろうか、また行ってみたいと思ってくれるだろうか。そういったことを探るところから、このコーナーの構想は生まれた。そして、子どもたちが説明抜きに楽しめ、自由にやってみたいことを自由に選び、そして居たいだけ居てもいい場所として、この「あじっぱ」が生まれた。幸い、週末や学校の休みの時期を中心に、子どもたちが集まる人気のスポットとなった。

みんな座ってゲームをしようよ
（「あじっぱ」にて）



おかあさん、一緒に遊ぼうよ

「あじっぱ」には、わが国と長く関係を結んできた韓国・中国・インドネシア・タイ・ポルトガル・オランダの国々で使われている品々が飾られた屋台が並んでいる。それぞれの屋台には、当館担当学芸員が現地で買い込んできた食器、衣装、履物、文具、お面、おもちゃなど、日常生活で見かけるものを並べている。わが国の屋台に並んでいる同種の品物と、それぞれの文様、材料、色彩、技法などを比較観察することができる。おもちゃや楽器を自由に使って遊ぶことができ、もしわからないことがあったりゲームの相手が必要だったら、ボランティアの方々が対応してくれる。子どもたちは、おとなとの会話によって自らの体験をふくらますこともできるようになる。

その奥にある「あじぎゃら」は、ガラスで仕切られており、意識的に上の展示室に近い静かな空間となっている。壁つきケースやのぞきケースなどには、郷土人形や食器類、また最近大人気の古文書『針聞書』も展示されている。またここでは、ボランティアや館の職員に手伝ってもらいながら、壁にあるボックスキットに納められている実際

の作品を手にとって、観察、計測、記述したりしながら、学芸員の仕事を体験してみることもできる。ケースのなかにどう展示したらいいか、どういう照明や説明がふさわしいか、いろいろと試してみるのである。こうした体験から、作品の見方、壊れやすい作品の取扱方法、どこをどのように見せたいのかを子どもたち自身が考えたり工夫する力が育まれ、学校教育とは違う、博物館独特の学びが実践できるのである。

環境に配慮した大建築空間

二一世紀にふさわしい博物館建築として、最新技術・材料と木材の積極的な利用によって空間を構成すること、さらに環境に配慮した自然冷媒の採用や自然エネルギーの有効利用などが設備面での指針とされた。その結果、大きく波を打つチタン製で鮮やかな青色屋根と南北の大きなガラス面（計八〇〇〇平方メートル）をもつ印象的な大建築空間が生まれた。設計者は、江戸東京博物館、島根県立美術館など多くの公共建築物を手がけてこられ、二〇〇〇年に「今世紀を創った世界建築家一〇〇人」に選ばれた菊竹清訓氏である。

建物の大きさは八〇×一六〇メートル、最大高は三六メートル。延べ床面積は三万平方メートル。敷地は一六万平方メートルにおよぶ。紫外線を含まない大量の光が二重のガラス壁をとおして射し込み、全体を明るくしている。またガラス面には周囲の森や空が映り込み、巨大な建物がもつ圧迫感を消している。二重ガラス窓によって内部空間は外気温変化の影響や結露から無縁となった。

チタン製の屋根裏にはスギの間伐材が全部で4000本使われている

エントランスロビー。南と西側からさし込んでくる光と来館者のグループ

南側。大海原を思わせるゆるやかな曲線を描く屋根。広大なガラス面には森と空が映り込んでいる

太陽熱であたためた水をエントランスロビーの床暖房に用いたり、太陽光パネルで必要な電力の一パーセントを自家発電したり、雨水を処理してトイレ用水に使うなど、省エネルギーの考え方で建てられている。

建物西側にある一階エントランスロビーにはミュージアムホール、「あじっぱ」、ミュージアムショップとティーラウンジが、二階には収蔵庫、事務室、博物館科学関連諸室、修復アトリエ、トラックヤードなどが、三階には特別展示室（三室で合計一五〇〇平方メートル）、四階には文化交流展示室（中央展示室と一二の小部屋で、合計四〇〇〇平方メートル）が、そして五階には機械室が置かれるなど、各階ごとに機能が明確にわけられている。敷地はゆるやかに傾斜しており、二階から上の博物館機能部は、免震装置を介して風化花崗岩岩盤上に置かれ、阪神淡路大震災級の地震が来ても、来館者はもちろん、展示室・収蔵庫も守られるよう設計されている。事実開館前の二〇〇四年三月と四月に起こった福岡西方沖地震の際にもまったく被害がなかった。また収蔵庫内部全面にスギ材やブナ材が貼りつけられているところから、空調が止まっても庫内の温湿度はきわめて安定した状態で推移する。

展示について

これまで開催してきた特別展には、開館記念展「美の国　日本」「中国　美の十字路」「うるま　ちゅら島　琉球」「南の貝のものがたり」、開館一周年記念展「海の神々」そして現在開催中の「若冲と江戸絵画（三月一一日まで）」がある。さまざまな地域と分野を扱っていることに気がつかれるだろう。

文化交流展示室では、日本の歴史を、Ⅰ縄文人、海へ（旧石器時代・縄文時代）、Ⅱ稲づくりから国づくり（弥生時代・古墳時代）、Ⅲ遣唐使の時代（飛鳥・奈良・平安時代）、Ⅳアジアの海は日々これ交易（鎌倉・室町時代）、Ⅴ丸くなった地球、近づく西洋（江戸時代）に区切って陳列している。旧石器時代から一九世紀半ばの開国の時期までにあたる。自前の収蔵品資料はまだまだごく少数だが、国立三館や地方自治体所蔵の作品多数を借用しており、絵画・書跡・文書・工芸品などを中心に頻繁に展示替えを実施している。

一階無料ゾーンへの来館者総数は、開館後一年を迎えた二〇〇六年一〇月一六日現在で約二二〇万人を数え、特別展と文化交流展示の観覧者は累計約二四〇万人にのぼる。当初の予想来館者数を大幅に超えるこの数字を今後も維持することは不可能であるが、市民とともにある博物館として観覧者にとって快適な環境と展示を楽しんでいただけるような、さまざまな展覧会やイベントを企画していきたいと思っている。